



二人の母に愛され、
その愛に傷つき、
彼はジョン・レノンになった。

歌い愛い歌
たをなつ
ん叫かて
だんっな
でたんか

NOWHERE BOY

ノーウェアボーイ

ひとりぼっちのあいつ



アーロン・ジョンソン クリスティン・スコット・トーマス アンヌ＝マリー・ダフ
監督：サム・テイラー＝ウッド 脚本：マット・グリーンハルシュ 主題歌：ジョン・レノン「マザー」(「ジョン・レノンアンソロジー」収録/EMIミュージック・ジャパン)
提供・配給：ギャガGAGA powered by ヒューマックスエンターテインメント 夜撮：ブリティッシュ・カウンシル
原題：Nowhere Boy / 2009年/イギリス映画/シネマスコープ/ドルビーSR・ドルビーデジタル/98分/字幕：石田英子 ©2009 Leven Film Limited. All Rights Reserved. nowhereboy.gaga.ne.jp

FILM4 AND UK FILM COUNCIL PRESENT IN ASSOCIATION WITH NORTHWEST VISION AND MEDIA AND LIP SYNC PRODUCTIONS AND HANWAY FILMS AN ECOSSE FILMS PRODUCTION A SAM TAYLOR-WOOD FILM AARON JOHNSON ANNE-MARIE DUFF AND KRISTIN SCOTT THOMAS NOWHERE BOY DAVID THRELFALL DAVID MORRISSEY CASTING NINA GOLD ORIGINAL MUSIC BY WILL GREGORY ALISON GOLDFRAP MUSIC SUPERVISOR IAN NEIL JEREMY WOODHEAD COSTUME DESIGNER JULIAN DAY PRODUCTION DESIGNER ALICE NORMINGTON EDITOR LISA GUNNING DIRECTOR OF PHOTOGRAPHY SEAMUS MCGARVEY ASC/BSC CO-PRODUCER PAUL RITCHIE EXECUTIVE PRODUCER MARK WOOLLEY TESSA ROSS CHRISTOPHER MOLL JON DIAMOND TIM HASLAM WRITTEN BY MATT GREENHALGH PRODUCED BY ROBERT BERNSTEIN DOUGLAS RAE KEVIN LOADER DIRECTED BY SAM TAYLOR-WOOD





NOWHERE BOY

ノーウェアボーイ

ひとりぼっちのあいつ

〈英国エンパイア賞〉
ベスト・ニューカム：アーロン・ジョンソン

〈英国インディペンデント映画賞〉
最優秀助演女優賞：アンヌ＝マリー・ダフ

〈イブニング・スタンダード英国映画賞〉
最優秀女優賞：アンヌ＝マリー・ダフ

〈ロンドン映画批評家協会賞〉
最優秀助演女優賞：アンヌ＝マリー・ダフ

芸術家サム・テイラー＝ウッドの鮮烈な監督デビュー！
伝記映画ではない、暖かさ人間らしさに溢れる
作品が誕生した！
(ロンドン タイムズ紙)

ジョンと二人の母との三角関係が、何よりも型破りで、
そして切ない。
(バラエティ誌)

新鮮な映像表現と深い感動に、
ジョン・レノンの青春時代を探検するような感覚！
(ガーディアン紙)

アーロン・ジョンソンの瑞々しい演技が魅力的！
そして何よりもこの映画でジョン・レノンが
リバプールに帰ってきた！
(クリック・リバプール)

歌ってなんかいなかった。愛を叫んでいたんだ。



INTRODUCTION

世界がまだ見ぬ、誰もまだ知らなかった

トゥルーストーリー

青年ジョン・レノンと二人の“母”の真実の物語

母。いつもそばにあるその存在に、人は時に癒され、時に翻弄され、言葉にならない様々な感情を与えられながら大人になる。若き日のジョン・レノンには母が二人いた——。生き方を教えてくれた母、そして音楽の可能性を解放してくれた母。これは、二人の“母”と大人になる前のジョンをめぐる愛の葛藤と故しの物語である。

1950年代のリバプール。ジョン・レノンは伯母ミミに育てられている反抗期真っ最中の問題児。彼はある日、近所に実の母ジュリアが住んでいることを知る。ジョンに音楽の素晴らしさを教えてくれる自由奔放なジュリアに対し、厳格な伯母ミミはジョンに向上心を持った大人になることを望む。母と伯母、それぞれの愛し方——。彼はその愛の違いに心が引き裂かれるとともに、普通とは違う自分の境遇を受け入れることもできない。行き場のない孤独に心がち切れそうになっていた中で迎えた17歳の誕生日、彼は母たちと自分を巡る哀しみの過去を知ることになる——。辛い気持ちを振り切るように音楽に没頭していくジョン。バンドの結成、そしてポール・マッカートニーとの出会いを通じて、孤独と母への切ない想いは音楽への原動力へと変わっていった。やがてジョン・レノンは未曾有の伝説に向かって走り出す——。

伝説として語り継がれ、没後30年経つ今でも知らない人はいない音楽界の英雄、ジョン・レノン。2010年はジョンの生誕70周年のメモリア

ルイヤーであり、彼やビートルズに再び注目が集まっている。しかしこの物語は私たちが知っている彼の才能と栄光の軌跡を迎えるものではなく、誰もが経験をする青春の葛藤を鮮やかに切り取った作品だ。ただ違うのは、青年が後にビートルズのジョン・レノンとなること、そしてそのジョンには二人の“母”がいたということ——。私たちは今まで語られることのなかった若きジョンの内面に触れると同時に、彼がその時代に体験した特別な物語に大きく心揺さぶられるだろう。

監督はイギリスの現代アート界で注目を集める女性芸術家のサム・テイラー＝ウッド、[イングリッシュ・ペイシェント]などを手掛けた巨匠監督アンソニー・ミンゲラにその才能を見出された彼女は、本作が長編デビュー作となる。彼女は芸術家としての感性で映像に豊かな表現を与え、一人の青年の成長の軌跡を瑞々しく描くことに成功した。ジョン・レノンを演じるのは、「純粋さとセクシーさを併せ持つ貴公子」アーロン・ジョンソン。若手俳優の中で群を抜いた魅力を持つ新星である。彼は孤独と好奇心が同居する繊細なジョン・レノンを、その確かな才能で見事に演じきった。対照的な二人の“母”には、伯母ミミ役にクリスティン・スコット・トーマス([イングリッシュ・ペイシェント])、実母ジュリアをアンヌ＝マリー・ダフ([マグダレンの祈り])という実力派女優が抜擢されている。また若き日のポール・マッカートニーにトーマス・ブローディ・サングスター([ラブ・アクチュアリー])、ジョージ・ハリソンには新人のサム・ベルが扮し、その後のビートルズの活躍を彷彿とさせる見事な演奏シーンを披露している。

そしてもうひとつ、この作品に花を添えているのは、ジョンが当時衝撃を受けたエルヴィス・プレスリー、パディ・ホリーなどのアメリカンロックや、ビートルズの前身クオリーメンなどの今なお輝き続ける名曲の数々。ジョンが愛した音楽たちは母への切ない想い一つになり、この愛の物語に一層の深みを与えている。

タイトル「ひとりぼっちのあいつ」：ザ・ビートルズのアルバム「ラバーソウル」に収録されている「ひとりぼっちのあいつ」(原曲：NOWHERE MAN) から引用



愛する人を
憎む人生なんて
意味がない。
そうだろ、母さん。



二人の“母”に愛され、その愛に傷つき、 青春を疾走した青年。 やがて彼は“ジョン・レノン”になる——。

1950年代半ばのリバプール。青年ジョン・レノンは幼いころから伯父と伯母に育てられていた。生意気で問題児のジョンを厳しくしつける伯母のミミ。一方温かい人柄の伯父ジョージは、音楽と楽しいことが大好きでジョンに対して友だちのように接していた。しかし、ジョージが心臓発作で急死、ジョンはミミにその悲しみをぶつけようとするも、彼女は「しっかりしなさい、これからは2人なのよ」と冷静に言い放つ。

伯父の葬儀の後、淋しさを抱えているジョンに、いとこが本当の母親に会いたくないかと尋ねてくる。意外なことに、ジョンの母は伯母の家から歩いていける距離に住んでいるというのだ。恐る恐る実の母ジュリアの家を訪ねたジョンを、ジュリアはまるで恋人のように強く抱きしめる。厳格な伯母とは対照的に、アメリカの新しい音楽ロックンロールを聞き、歌って踊って人生を楽しむジュリアと過ごす時間は、彼にとって新鮮で楽しくて仕方ない。

ミミには内緒で、ジョンとジュリアの逢瀬は続く。ジュリアから、エルヴィス・プレスリーやパンジーの弾き方を教わるうちに、ジョンの中には音楽への憧れが芽生え、それを与えてくれた母に彼は夢中になる。しかし、ジュリアには内縁の夫ボビーと幼い娘たちという新しい家族があり、その家庭にジョンの居場所はどこにもなかった。次第に彼の心の中には言い様のない孤独感が積もっていく——。



「ただ普通に愛されただけなのに——。」二人の“母”のどちらにも自分の悲しみや孤独をぶつけられず、行き場のない苦しみを抱えるジョン。彼は次第に音楽へと没頭していく。やがてジョンは学校の男子トイレに仲間を集め、スキップ・バンド・ザ・クォーリメンを結成。最初のライブをしたセント・ピーターズ教会で、ポール・マッカートニーと出会う。ジョンとポールはすぐにお互いの才能を認め合い、共に音楽づくりはじめる。ライブを重ねていく中で、ジョージ・ハリソンもバンドに加わった。

そんな中、ジョンの17歳の誕生日の夜、衝撃的な出来事が起こる。自分の生い立ち、母を巡るたくさんの秘密に爆発したジョンが、ジュリアとミミに激しく詰め寄ったのだ。「親父はどこにいる？何故僕は伯母さんに育てられているんだ？母さんは僕を捨てたのか！？」取り乱すジュリアと悲痛な表情のミミ。ジョンはこの日、自分を巡る辛い事実を知ることとなる。その答えを聞いた彼はその場から逃げだすしかなかった——。

しかし、二人の母の告白に傷つきながらも、ジョンは今の自分がこの二人を愛していることに気づく。三人が経験してきたつらい事実を前にしても、彼はミミの心の中にも流れる静かな愛のおかげで成長し、母のおかげで音楽の可能性を見出したのだ——。彼の内面は深い葛藤から救いという新しいスタートに向かっていった。

だが、その矢先、決して逃れることのできない運命が彼を待ち受けていた——。



PRODUCTION NOTES

<未知のジョン・レノン像を形作るプロジェクト>

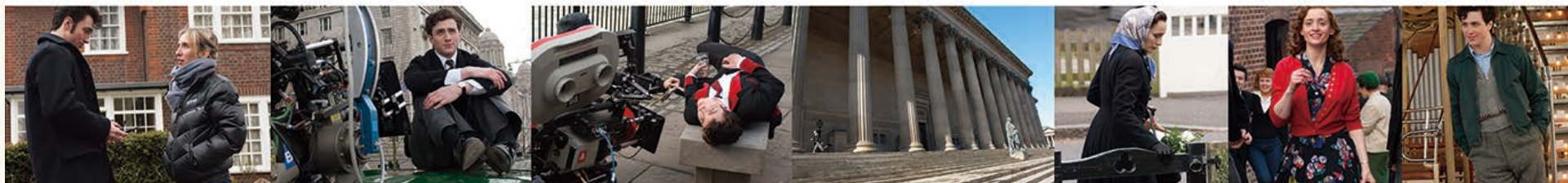
エコッセ・フィルムズとプロデューサーのロバート・バーンスタインは、ジョン・レノンに焦点を当てたプロジェクトを以前から温めていた。それは誰もが知っているビートルズ結成以降のジョン・レノンを描くのではなく、彼のリバプールでの10代の日々、そして後にロックの象徴となるジョンを形作るようになったパワフルで影響力の大きい二人の「母」との関係性をテーマにしたものである。

まずは脚本家を誰にするかが課題であった。ジョンが口にする台詞を書くという、とてつもなく重要で、少し恐ろしくすらある仕事を任せる人物だったからだ。白羽の矢が立ったのは、近年注目を集めている脚本家マット・グリーンハルシュ。ジョイ・ディヴィジョンの伝記映画『コントロール』(07)で英国アカデミー賞を取った彼は、音楽に関わる人物の描写に抜きん出た才能を持つ一人だ。このプロジェクトに快諾をしたグリーンハルシュはリバプールを訪ね、街の雰囲気を感じ取り、その時代の人々がどんな風に話していたのか、具体的なインスピレーションを元に脚本を書いていった。

次に監督を誰にするかエコッセ・フィルムズが探し始めた矢先、すでに「自分がこの映画の監督をするのだ」と強く決めていた人物がいた。偶然、脚本を読み夢中になったサム・テイラー＝ウッドだ。現代アーティストとして映像作品にも才能を発揮していた彼女は、レノンの生い立ちやクリエイティブな精神が彼女自身の人生と重なることに運命的な出会いを感じていたのだ。プロデューサー陣は、彼女の熱意に圧倒されたが、それ以上に、彼女の才能を感じ取り、すぐさま監督を任せることを決意する。演出するにあたって彼女は、有名なジョン・レノンについての映画だということを極力、意識しないようにしたという。「私はジョン・レノンの音楽のファンで、ビートルズの曲に親しんで育ったの、もちろん曲も全部知っている。でも私が作っている映画は、大人になろうとしている青年の映画で、彼はまさに通過地点にあって感情の揺れる旅の途中、これは成長物語だということを決して忘れなかった。」

<現代のジョンを探して>

この作品の最も困難なステップは若き日のジョン・レノンを演じることのできる俳優を見つけることだった。オーディションをしていく中で、際立った魅力を持ったのはアーロン・ジョンソン。ルックス、自信あふれる態度、カリスマ性はまさにジョンそのもの。その場にいた全員が瞬



間的に彼がベストだと確信したという。

しかしアーロンにとっては大きなチャレンジだった。方言、歌、ギターの練習、すべてが初めてだった彼は、無理に自分をジョン・レノンに似せようとしたのではなく、ジョン・レノンの生き方を模索したのである。それはジョンが愛した音楽を聴くことであり、クオリーメンのバンド仲間たちとの演奏を心から楽しむことだった——。出来上がった映画を見てオノ・ヨーコが彼の演技をとても気に入ったという素晴らしいお墨付きをもらった時、彼の努力は大きな自信へとつながったのである。

母ジュリア役を熱望していたのはアンヌ＝マリー・ダフ。舞台や映画で幅広く活躍する彼女はオーディションでこの役を勝ち取った。彼女は言う。「危なっかしい人生を送り、危険なくらいに魅力的な女性。それはあの時代には困難な生き方であり、周りからは誤解されやすいものだった。この繊細さと複雑さを併せ持った女性を演じてみたかったの。」

伯母ミミ役を演じたクリスティン・スコット・トーマスは、脚本に強く惹かれこの役を快諾した。クリスティンにとってミミ役はティーンエージャーの親代わりということも含めて、今までにない新しい役柄への挑戦だった。彼女はジョンにとって偉大な存在だったこの女性を、厳格



かつチャーミングに演じることに成功している。

“ザ・クオリーメン”のメンバーのキャストの観点は、単なるそっくりさん探しではなく、メンバーとバンドのスピリットを体現できる人物を探すことだった。

マッカートニーを演じたのは子役時代から幅広い活躍をするトーマス・ブローディ・サングスター。「この役は好き勝手に役を演じることでなく、言葉もギターも弾き方も何もかもポールのようにしなければいけない。そんな演技は初めてだったけど、僕にとっては今までと違う大きなチャンスだった。最初は物乞いみたいな最低の経験だったよ」と語っている。

映画の中に登場する未来のビートルズを完成させるジョージ・ハリスンを演じるのは新人のサム・ベル。彼は、ジョージがどんな風にギターを弾いた、どんな癖があったなどを体面に叩き込むために、マニアのように夢中で参考映像を観尽くしたという。ビートルズの中でジョージが一番好きだった彼にとって、それは夢のような体験であり、決して苦しいプロセスではなかった。

<刺激的でセクシーなリバプールを>

監督のサム・テイラー＝ウッドと撮影のシマス・マッガヴェイは、1950年代の戦後の不況下にあるリバプールを描いた映画だからといって、埃っぽい灰色の記録映画風のスタイルにはしたくないという考えを持っていた。ジョン・レノンのエネルギーを表現できるような、そして世の中に飛び出していく直前の彼にふさわしい刺激的でセクシーな映像で、彼らは色鮮やかに当時のリバプールとジョンを取り巻く風景を映像で切りとっている。

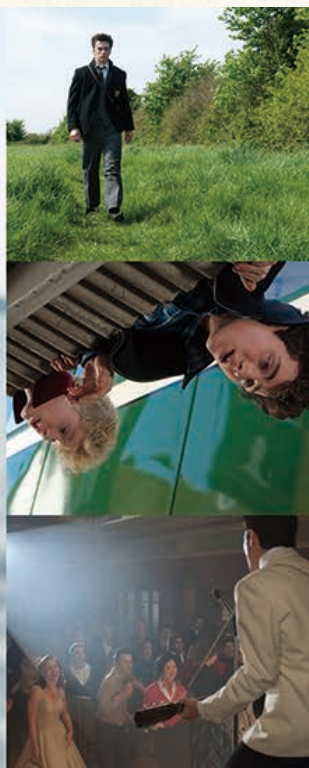
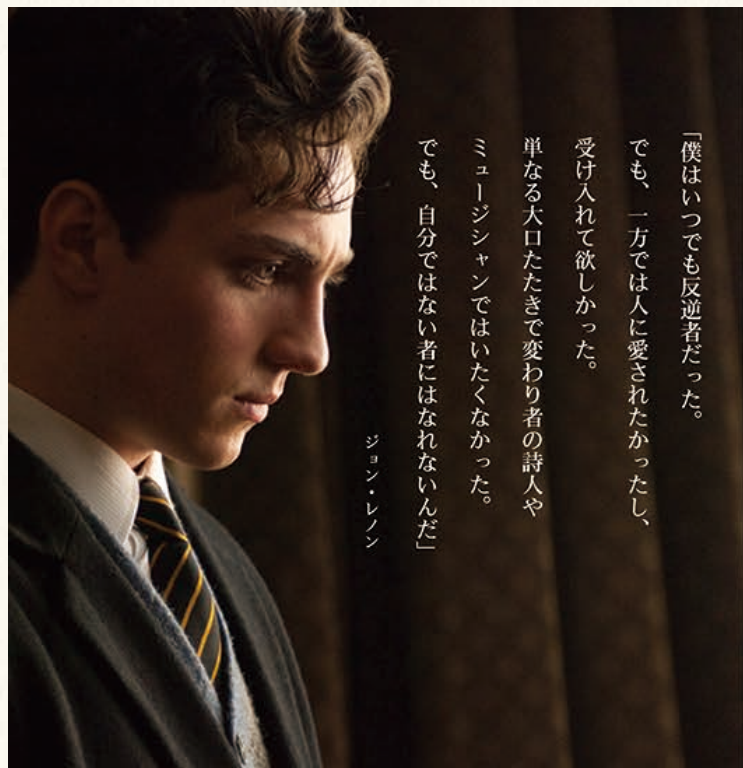
また彼らは、ジョンと家族そして仲間たちが生きたリバプールの実際の“その場所”で撮影することに徹底的にこだわった。しかし、そこには難しい問題が立ちだかっていた。過去50年余りの間に町がすっかり変貌していたからだ。当時のリバプールのランドマークであったロイヤル・ライヴァー・ビルディングを撮ろうとしても、周辺をびかびかの新しい建物が囲んでいたり、工事中だったり——。とはいえジョンが育ったウールトン地区は今でも緑の茂る住宅地で、基本的には変わっていないことは幸運だった。こうして多くのシーンをその場所で撮影することに恵まれ、その結果、物語にリアルな情景を加えることができたのである。

どこにもない場所

<NOWHERE で人々は何を着ているか>

ジュリアン・デイによる衣装もまた、時代物の映画で見られるようなぼんやりとした、古くさいものではなく、50年代のリバプールの楽しさや活気に溢れた雰囲気を作り出すことが企図された。

まずミミとジュリアがどんな服を着るべきか、対照的な2人の性格をどのように服装で表すか。ミミの色は青、緑、茶色、グレー。デザイン的には40年代から50年代のもの。そしてジュリアは50年代から60年代のファッションでカラフルに。ジュリアの衣装には、色々な種類の赤が取り入れられた。また主人公ジョンの衣装は、作品の中で彼の自身の成長を感じさせる効果のひとつ、物語の最初ではジョンはミミの影響で多少保守的で地味な格好をしており、青や緑やグレーを着ている。その後、母ジュリアと出会い、彼の心が解放されていくにつれて、音楽の趣味だけでなく服のセンスにも影響を受け、服の色やトーンが徐々に変わっていくのである。



ビートルズと ジョン・レノンを 理解するための どこにもない資料

ジョンとママとミミが
暮らしたリバプール

ビートルズとは？…1962年から1970年までの短い活動期間で世界を変えた史上最高のロック・バンド。キネスは「もっとも成功したグループ・アーティスト」として記録されている。メンバーはジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スター。ロック界のバイオニック的存在で、球場でロック・コンサートを行った初めてのロック・バンドであり、日本武道館で初めてロック・コンサートを行ったのも彼らである。1964年にはビルボードの1位から5位までを独占、アメリカで初めて出演したテレビ番組「エド・サリバン・ショー」の視聴率は空席の72%を記録した。そのほかにもロック・ミュージシャンとして初の勲章を受章するなど、その革新一筋に世界が注目するアーティストだった。昨年2009年に全オランダ・アルバムがリマスターされ話題となり、解禁後40年にもかかわらず日本でも驚異的な売上を記録。オリコンで「洋楽アーティスト・オブ・ザ・イヤー」を受賞した。



HA / LFI / Zeta Image

ジョン・レノンと母ジュリア 1946年 Getty Images



ミミ、ジョンの母親と 1965年 Theophanis / Getty Images

ジョン・レノンとは？…1940年10月9日生まれ。両親と暮らすことを許されず伯母ミミのもとへ引き取られる。不幸な幼少時代と言われることが多いが、ミミとその夫ジョージの大きな愛情に包まれて育つ。ケンカっばい反面、読書に親しみ、絵画を好むといった芸術家肌の一面も持っていた。すでに11歳のころから自分で描いたイラストや雑誌の切り抜きなどを集めて本を編み立てていた。エルビス・プレスリーの姿の衝撃で音楽に目覚め、ギターを手にし、ビートルズの前身となるクォーリーメンを結成。ポールと出会ってからは作曲も始め、のちに世界を揺るがす作曲チーム、レノン＝マッカートニーを結成する。デビュー後も目立ち着せぬシニカルな発言をしたり、リバプールを去るまでなかったりと、それまでの芸界のしきたりを破った。そのナチュラルな態度は世界中の若者の共感を呼んだ。1968年には日本人芸術家オノ・ヨーコと出合い、のちに結婚。平和活動にも力を入れ、楽曲「イマジン」で歌った「国境のない世界を想像してごらん」というメッセージは今も人々の心に刻まれている。いつの時代も若者のオビエント・リーダー的存在だったが、1980年12月8日、狂信的ファンの銃弾に倒れる。

● 映画に登場するリバプールゆかりの地 ●



ストロベリー・フィールド

白い門が印象的な後世世による記念館で、ジョンは幼いころよく車を乗り替えて遊びに行ったという。泉の深い字にもちろんジョンは共感を覚えたのだろうか。のちにこの場所をモチーフにした楽曲「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」をビートルズの14枚目のシングルとして発表。今も門は現存しており、ビートルズ・ファンの聖地となっている。



キャバレー・クラブ

ビートルズがデビュー前後、およそ2年半にわたり300回近くも出演したライブ・ハウス。ワインの地下貯蔵庫を改造しているため換気が悪く、ビートルズが演奏する際はバンドの熱気と暑気は観客のせいと高気圧が降り落ちてきたという伝説を持つ。劇中でジョンが入店を祈られるシーンがあるが、ビートルズが出演するまではジャズ専門の大人のクラブだった。



クォーリー・バンク中学校

昔、石切場(Quarry)があったことから命名された。ジョンが通い、初めて結成したバンドの名前のもとにもなっている。ここに通っていたクォーリーメンのメンバーは後に、ビートルズ(決壊版)、エリック・クリフス(ギター)、ロッド・デビス(バシジャン)。ちなみに、クォーリーメンは1997年に再結成し、現在も活動中。中心人物はロッド・デビスである。

セント・ピーターズ教会

クォーリーメンはこの教会主催のバザーで演奏。観客のなかにはポールの変もあつた。ライブの合間にジョンとポールは出合い、後日ポールはバンドに誘われ、これを快諾する。このことで、ふたりが出会った1957年7月6日は歴史の日として記憶されることとなる。ジョンの母ジュリアも伯母ミミもクォーリーメンの演奏を観に来ていたことが証言されている。



メンディグップス

ジョンの育った家で、ミミ伯母さんとジョージ伯父さんの家の愛称。ジョンとポールがギターを習うさいとミミから移動させられるのは玄関水手。ジョンもポールもこの場所の音の響きが入っていたという。現在はジョンの夫人オノ・ヨーコが買い取り、歴史的建造物を保護する団体ナショナル・トラストによって維持されている。内部は一般公開されており、ジョンの部屋も再現されている。

● キーワードで語るジョン・レノン ●

ジョンとロックンロール

ラジオから聞こえてくるエルビス・プレスリーの歌う「ハートブレイク・ホテル」にしびれたジョンはロックンロールに心酔。「ロックンロールだけがリアルで、そのほかのことは嘘っぽかった」と語っている。以後、生涯ロックンロールへの情熱と敬愛の念は消えることはなかった。

ジョンと眼鏡

ジョンは極度の近視だったが、「ヤウに見られる」ことを嫌い、人前では眼鏡をかけたかった。眼鏡をかけたロックンローラー・パディ・ホリーのファンになってからは、徐々に眼鏡に抵抗を弱くなくなっていたようだ。劇中でもホリーのような果敢の眼鏡をかけている。しかし、本格的に眼鏡をかけるのは、26歳のときに出演した映画「ジョン・レノンの僕の戦争」で兵隊役を演じてからで、以降、丸メガネといえばジョン・レノンというイメージが定着した。

ジョンとギター

ジョンがギターを手にしたのは、ロニー・ドネガンというスキップルのミュージシャンの影響が大きく、ギターを弾き、好きなことを歌えば注目浴び、特別な存在になれると感じたという。ジョンの記憶だと、最初に手に入れたギターは借りもので、その次のギターが、母ジュリアが過価販売で買ってくれたものだという。ミミ伯母さんの口くせは「ギターも趣味としてはいいのよ、ジョン。でもそれで生活していくことはできないでしょ」だった。ジョンが世界的成功を収めてから、あるファンがこの言葉をもとにプレートをミミにプレゼントし、ミミはそれを大切に飾っていたという。

ジョンとタバコ

生涯タバコを愛したジョン。劇中でもかなりの頻度でタバコを吸うシーンがあるが、「金がないのでタバコが手に入らない」ことも多く、そんなときは煎茶の葉っぱを紙で巻いて、タバコのつもりでいたという。ジョンは晩年、禁煙しようと試みたことがあるが、極度にイライラするため断念した。ジョンが吸った銘柄はミドル・ネームと同じ「ウィンストン」をはじめ、ビートルズ時代には「セント」。晩年は「シガン」だった。

ジョンと別れ

まず、映画に描かれているように、父親とはら離れて23歳のときに再会。表裏のようだったジョージ伯父さんが急死するのはジョン14歳のとき。肝臓の病気だった。ジョンは悲しみをもてあまし、狂ったようにガラガラ笑ったという。母ジュリアを亡くしたのは17歳。さらに、アート・スクール時代の親友スチュアート・アトク(スチュ)が21歳のときに他界。ジョンは人生の早い段階で大切な人と決して少くない別れを経験している。



● ジョンとポール ●

史上最高にして最後と謳われた作曲家チーム、レノン＝マッカートニーは劇中に描かれているように、学生時代に築かれたものだ。どちらか一方が書いた曲でもふたりの連名で発表するという取り決めのおかげで、余計なライバル心を排除し、いい曲を作ることに専念できたとも言える。結果、ふたりは多くのヒット曲をこの世に残している。この取り決めは契約を交わしたわけではなく、青年ふたりの口約束にすぎないところがいい。ふたりの目は、母親を亡くした共通の心の傷で深まった。ビートルズ時代、ジョンは「ジュリア」、ポールは「レット・イット・ビー」で母のことを歌っている。ポールは現在ブザー一申で、多くのレノン＝マッカートニー・ソングを扱い、ソロ作品の「ヒア・トゥ・デイ」をジョンに捧げている。



この映画には、
ジョンの思春期の深い苦悩と
真実の愛が描かれています。
ジョンの愛を求める心の旅は、
ここから始まったのです。

オノ・ヨーコ

CAST

アaron・ジョンソン: ジョン・レノン	AARON JOHNSON : John Lennon
アンヌマリー: ダフ・ジュリア・レノン	ANNE MARIE DUFF : Julia Lennon
クリスチン・スコット・トーマス: ミミ・スミス	KRISTIN SCOTT THOMAS : Mimi Smith
デヴィッド・モリスシー: ボビー・ディキンス	DAVID MORRISSEY : Bobby Dykins
デヴィッド・スレルフォール: ジョージ・伯父さん	DAVID THRELFALL : Uncle George
トーマス・ブローディ・サングスター: ポール・マッカートニー	THOMAS BRADIE SANGSTER : Paul McCartney
ジョシュ・ボルト: ピート・シャットン	JOSH BOLT : Pete Shotton
サム・ベル: ジョージ・ハリスン	SAM BELL : George Harrison
オフェリア・ラヴィボンド: マリー・ケネディ	OPHELIA LOMBOND : Marie Kennedy

STAFF

サム・テイラー・ウッド: 監督	SAM TAYLOR-WOOD : Director
マッド・グリーンハルシュ: 脚本	MATT GREENHALGH : Screenplay
シニマス・マッガーウェイ: 撮影	SEAMUS MCGARVEY : Cinematographer
ダグラス・レイ: プロデューサー	DOUGLAS RAE : Producer
ロバート・バーンスタイン: プロデューサー	ROBERT BERNSTEIN : Producer
ケヴィン・ローダー: プロデューサー	KEVIN LOADER : Producer
イアン・ニール: ミュージック・スーパーバイザー	IAN NEIL : Music Supervisor
アリソン・ゴールドフラップ: 音楽	ALISON GOLDFRAPP : Music
ウィル・グレゴリー: 音楽	WILL GREGORY : Music
リサ・ガニング: 編集	LISA GUNNING : Editor

主題歌: ジョン・レノン「マザー」(「ジョン・レノンアンソロジー」収録/EMIミュージック・ジャパン)
 オリジナル・サウンドトラック: ソニー・ミュージックエンタテインメント
 原題: Nowhere Boy / 2009年/イギリス映画/シネマスコープ/ドルビーSR・ドルビーデジタル/98分/字幕: 石田典子
提供: 配給: キヤク GAGA* powered by ビューマックスエンターテインメント 後援: フリライオン・カウズナル

nowhereboy.gaga.ne.jp
11.5 (Fri) ROADSHOW